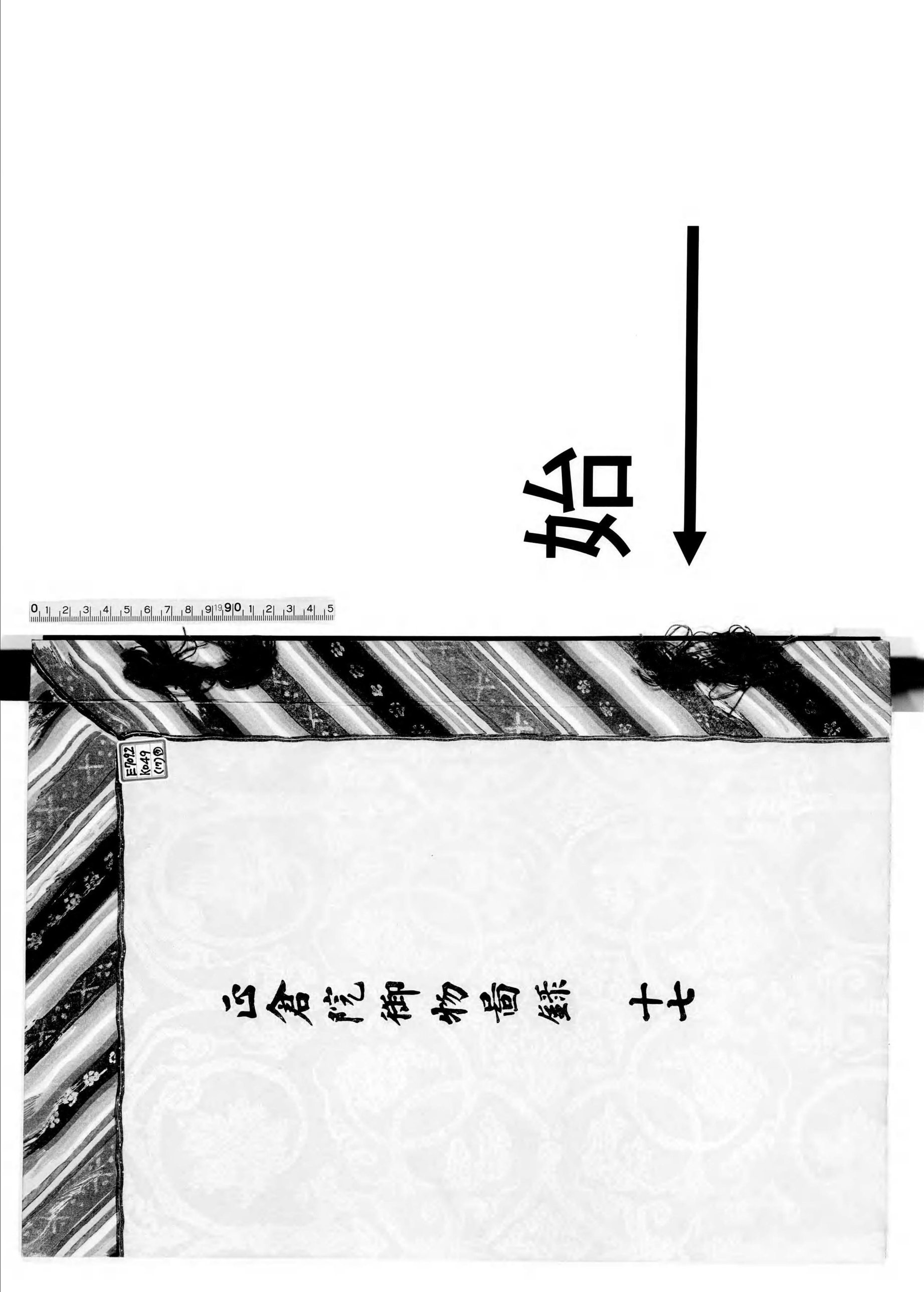
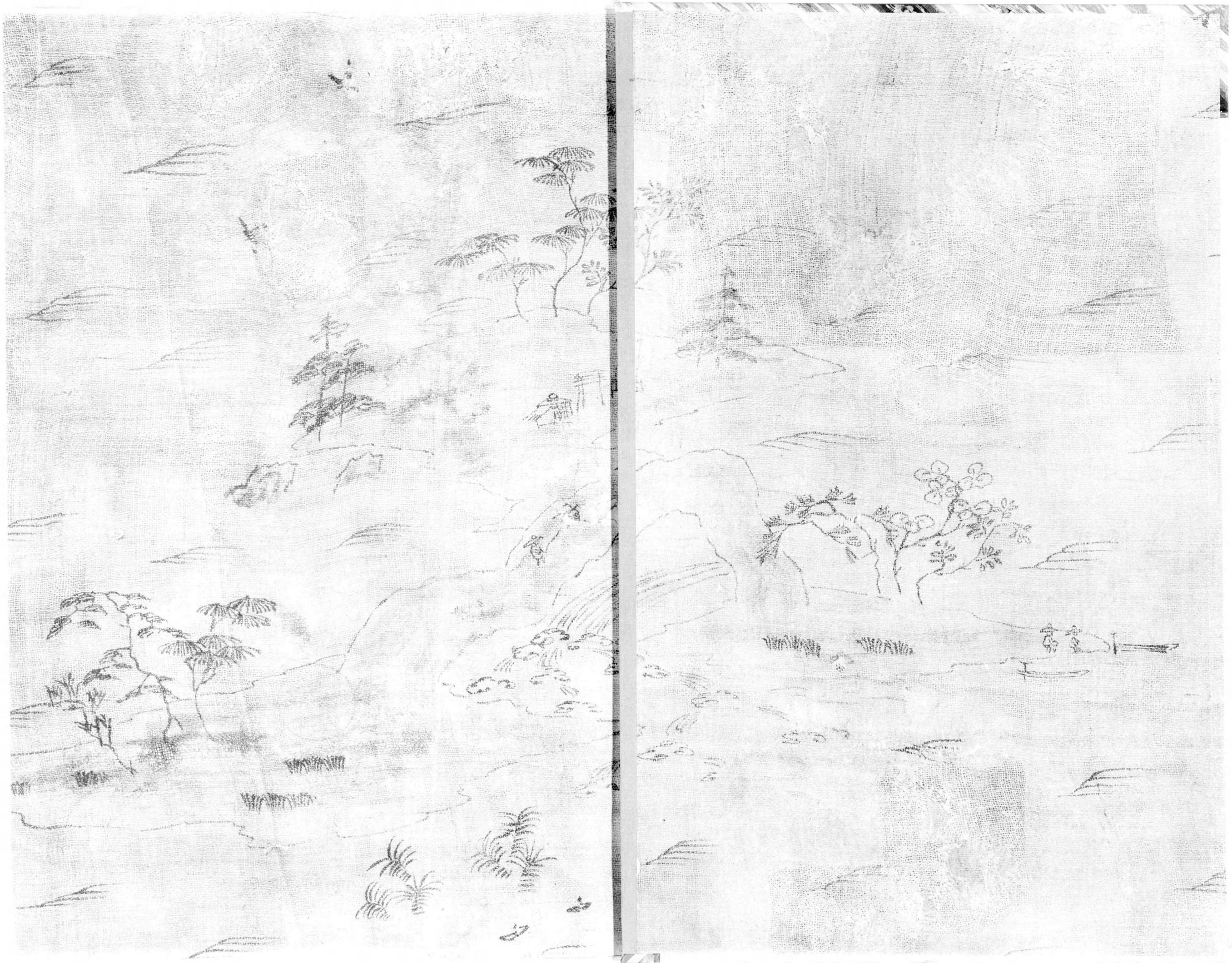


E7012
K049
(17)

当金院御物高覆　十七



E
709.2
KO49
(17)

正倉院御物圖錄

第十七輯

目次

第一圖　獅子　上面　（第百二十八號）
第二圖　同　上側面
第三圖　同　上背面
第四圖　獅子　面　（第百二十七號）
第五圖　同　上側面
第六圖　獅子　面　（第百三十號）
第七圖　同　上正面・背面
第八圖　獅子　面　（第百二十四號）
第九圖　同　上正面
第十圖　同　上側面
第十一圖　同　上耳墨書
第十二圖　獅子　面　（第百三十一號）
第十三圖　獅子　面　（第百二十五號）
第十四圖　同　上正面・背面
第十五圖　獅子　面　（第百二十六號）
第十六圖　同　上側面・正面
第十七圖　獅子　面　（第百二十九號）
第十八圖　同　上側面

国立国会図書館蔵書

国立国会
29.5.26
図書館
寄贈

U39026

第四十四圖　大波波波波同波力力力力吳同吳崑崑崑崑崑崑迦迦迦迦金孤羅羅羅　羅　士士士士女　女　崙崙　崙崙崙崙　樓樓樓　剛父門門門　門　面面　崙崙崙崙　羅羅羅面面面面上面面面面面面面上面（？）（？）面面面面面面面面面面

第四十四圖　第四十四圖　第四十一圖　第四十圖　第三十九圖　第三十八七圖　第三十六圖　第三十五圖　第三十四圖　第三十三十二圖

第四十三圖　第四十二圖　第四十圖　第三十圖　第三十圖　第三十圖　第三十圖　第三十圖　第三十圖　第三十一圖

第三十一圖　第三十九圖　第二十八圖　第二十七圖　第二十六圖　第二十五圖　第二十四三圖　第二十二圖　第二十一圖　第二十圖　第十九圖

金金同金吳吳吳吳治治治治治同治獅獅獅

第六十九圖　隨群面類
第六十八圖　隨群面類
第六十七圖　隨群面類
第六十六圖　隨群面類
第六十五圖　隨群面類
第六十四圖　隨群面類
第六十三圖　隨群面類
第六十二圖　隨群面類
第六十一圖　隨群面類
第六十圖　隨群面類
第五十九圖　隨群面類
第五十八圖　隨群面類

第五十七圖　醉群面類
第五十六圖　醉群面類
第五十五圖　醉群面類
第五十四圖　醉群面類
第五十三圖　醉群面類
第五十二圖　醉群面類
第五十一圖　醉群面類
第五十圖　醉群面類
第四十九圖　醉群面類
第四十八圖　醉群面類
第四十七圖　醉群面類
第四十六圖　醉群面類

第四十五圖　醉群面類
第四十四圖　醉群面類
第四十三圖　醉群面類
第四十二圖　醉群面類
第四十一圖　醉群面類
第四十圖　醉群面類
第三十九圖　醉群面類
第三十八圖　醉群面類
第三十七圖　醉群面類
第三十六圖　醉群面類
第三十五圖　醉群面類
第三十四圖　醉群面類

第三十三圖　醉群面類
第三十二圖　醉群面類
第三十一圖　醉群面類
第三十圖　醉群面類
第二十九圖　醉群面類
第二十八圖　醉群面類
第二十七圖　醉群面類
第二十六圖　醉群面類
第二十五圖　醉群面類
第二十四圖　醉群面類
第二十三圖　醉群面類
第二十二圖　醉群面類

第二十一圖　醉群面類
第二十圖　醉群面類
第十九圖　醉群面類
第十八圖　醉群面類
第十七圖　醉群面類
第十六圖　醉群面類
第十五圖　醉群面類
第十四圖　醉群面類
第十三圖　醉群面類
第十二圖　醉群面類
第十一圖　醉群面類
第十圖　醉群面類

第九圖　醉群面類
第八圖　醉群面類
第七圖　醉群面類
第六圖　醉群面類
第五圖　醉群面類
第四圖　醉群面類
第三圖　醉群面類
第二圖　醉群面類
第一圖　醉群面類
第五十圖　醉群面類
第五十一圖　醉群面類
第五十二圖　醉群面類

第五十三圖　醉群面類
第五十四圖　醉群面類
第五十五圖　醉群面類
第五十六圖　醉群面類
第五十七圖　醉群面類
第五十八圖　醉群面類
第五十九圖　醉群面類
第六十圖　醉群面類
第六十一圖　醉群面類
第六十二圖　醉群面類
第六十三圖　醉群面類
第六十四圖　醉群面類

第六十五圖　醉群面類
第六十六圖　醉群面類
第六十七圖　醉群面類
第六十八圖　醉群面類
第六十九圖　醉群面類
第七十圖　醉群面類
第七十一圖　醉群面類
第七十二圖　醉群面類
第七十三圖　醉群面類
第七十四圖　醉群面類
第七十五圖　醉群面類
第七十六圖　醉群面類

第七十七圖　醉群面類
第七十八圖　醉群面類
第七十九圖　醉群面類
第八十圖　醉群面類
第八十一圖　醉群面類
第八十二圖　醉群面類
第八十三圖　醉群面類
第八十四圖　醉群面類
第八十五圖　醉群面類
第八十六圖　醉群面類
第八十七圖　醉群面類
第八十八圖　醉群面類

第八十九圖　醉群面類
第九十圖　醉群面類
第九十一圖　醉群面類
第九十二圖　醉群面類
第九十三圖　醉群面類
第九十四圖　醉群面類
第九十五圖　醉群面類
第九十六圖　醉群面類
第九十七圖　醉群面類
第九十八圖　醉群面類
第九十九圖　醉群面類
第百圖　醉群面類

第百一圖　醉群面類
第百二圖　醉群面類
第百三圖　醉群面類
第百四圖　醉群面類
第百五圖　醉群面類
第百六圖　醉群面類
第百七圖　醉群面類
第百八圖　醉群面類
第百九圖　醉群面類
第百十圖　醉群面類
第百十一圖　醉群面類
第百十二圖　醉群面類

第百十三圖　醉群面類
第百十四圖　醉群面類
第百十五圖　醉群面類
第百十六圖　醉群面類
第百十七圖　醉群面類
第百十八圖　醉群面類
第百十九圖　醉群面類
第百二十圖　醉群面類
第百二十一圖　醉群面類
第百二十二圖　醉群面類
第百二十三圖　醉群面類
第百二十四圖　醉群面類

第百二十五圖　醉群面類
第百二十六圖　醉群面類
第百二十七圖　醉群面類
第百二十八圖　醉群面類
第百二十九圖　醉群面類
第百三十圖　醉群面類
第百三十一圖　醉群面類
第百三十二圖　醉群面類
第百三十三圖　醉群面類
第百三十四圖　醉群面類
第百三十五圖　醉群面類
第百三十六圖　醉群面類

第百三十七圖　醉群面類
第百三十八圖　醉群面類
第百三十九圖　醉群面類
第百四十圖　醉群面類
第百四十一圖　醉群面類
第百四十二圖　醉群面類
第百四十三圖　醉群面類
第百四十四圖　醉群面類
第百四十五圖　醉群面類
第百四十六圖　醉群面類
第百四十七圖　醉群面類
第百四十八圖　醉群面類

第百四十九圖　醉群面類
第五十圖　醉群面類
第五十一圖　醉群面類
第五十二圖　醉群面類
第五十三圖　醉群面類
第五十四圖　醉群面類
第五十五圖　醉群面類
第五十六圖　醉群面類
第五十七圖　醉群面類
第五十八圖　醉群面類
第五十九圖　醉群面類
第六十圖　醉群面類

第六十一圖　醉群面類
第六十二圖　醉群面類
第六十三圖　醉群面類
第六十四圖　醉群面類
第六十五圖　醉群面類
第六十六圖　醉群面類
第六十七圖　醉群面類
第六十八圖　醉群面類
第六十九圖　醉群面類
第七十圖　醉群面類
第七十一圖　醉群面類
第七十二圖　醉群面類

第七十三圖　醉群面類
第七十四圖　醉群面類
第七十五圖　醉群面類
第七十六圖　醉群面類
第七十七圖　醉群面類
第七十八圖　醉群面類
第七十九圖　醉群面類
第八十圖　醉群面類
第八十一圖　醉群面類
第八十二圖　醉群面類
第八十三圖　醉群面類
第八十四圖　醉群面類

第八十五圖　醉群面類
第八十六圖　醉群面類
第八十七圖　醉群面類
第八十八圖　醉群面類
第八十九圖　醉群面類
第九十圖　醉群面類
第九十一圖　醉群面類
第九十二圖　醉群面類
第九十三圖　醉群面類
第九十四圖　醉群面類
第九十五圖　醉群面類
第九十六圖　醉群面類

第九十七圖　醉群面類
第九十八圖　醉群面類
第九十九圖　醉群面類
第百圖　醉群面類
第百一圖　醉群面類
第百二圖　醉群面類
第百三圖　醉群面類
第百四圖　醉群面類
第百五圖　醉群面類
第百六圖　醉群面類
第百七圖　醉群面類
第百八圖　醉群面類

第百九圖　醉群面類
第百十圖　醉群面類
第百十一圖　醉群面類
第百十二圖　醉群面類
第百十三圖　醉群面類
第百十四圖　醉群面類
第百十五圖　醉群面類
第百十六圖　醉群面類
第百十七圖　醉群面類
第百十八圖　醉群面類
第百十九圖　醉群面類
第百二十圖　醉群面類

第百二十一圖　醉群面類
第百二十二圖　醉群面類
第百二十三圖　醉群面類
第百二十四圖　醉群面類
第百二十五圖　醉群面類
第百二十六圖　醉群面類
第百二十七圖　醉群面類
第百二十八圖　醉群面類
第百二十九圖　醉群面類
第百三十圖　醉群面類
第百三十一圖　醉群面類
第百三十二圖　醉群面類

第百三十三圖　醉群面類
第百三十四圖　醉群面類
第百三十五圖　醉群面類
第百三十六圖　醉群面類
第百三十七圖　醉群面類
第百三十八圖　醉群面類
第百三十九圖　醉群面類
第百四十圖　醉群面類
第百四十一圖　醉群面類
第百四十二圖　醉群面類
第百四十三圖　醉群面類
第百四十四圖　醉群面類

第百四十五圖　醉群面類
第百四十六圖　醉群面類
第百四十七圖　醉群面類
第百四十八圖　醉群面類
第百四十九圖　醉群面類
第五十圖　醉群面類
第五十一圖　醉群面類
第五十二圖　醉群面類
第五十三圖　醉群面類
第五十四圖　醉群面類
第五十五圖　醉群面類
第五十六圖　醉群面類

第五十七圖　醉群面類
第五十八圖　醉群面類
第五十九圖　醉群面類
第六十圖　醉群面類
第六十一圖　醉群面類
第六十二圖　醉群面類
第六十三圖　醉群面類
第六十四圖　醉群面類
第六十五圖　醉群面類
第六十六圖　醉群面類
第六十七圖　醉群面類
第六十八圖　醉群面類

第六十九圖　醉群面類
第七十圖　醉群面類
第七十一圖　醉群面類
第七十二圖　醉群面類
第七十三圖　醉群面類
第七十四圖　醉群面類
第七十五圖　醉群面類
第七十六圖　醉群面類
第七十七圖　醉群面類
第七十八圖　醉群面類
第七十九圖　醉群面類
第八十圖　醉群面類

第八十一圖　醉群面類
第八十二圖　醉群面類
第八十三圖　醉群面類
第八十四圖　醉群面類
第八十五圖　醉群面類
第八十六圖　醉群面類
第八十七圖　醉群面類
第八十八圖　醉群面類
第八十九圖　醉群面類
第九十圖　醉群面類
第九十一圖　醉群面類
第九十二圖　醉群面類

第九十三圖　醉群面類
第九十四圖　醉群面類
第九十五圖　醉群面類
第九十六圖　醉群面類
第九十七圖　醉群面類
第九十八圖　醉群面類
第九十九圖　醉群面類
第百圖　醉群面類
第百一圖　醉群面類
第百二圖　醉群面類
第百三圖　醉群面類
第百四圖　醉群面類

第百五圖　醉群面類
第百六圖　醉群面類
第百七圖　醉群面類
第百八圖　醉群面類
第百九圖　醉群面類
第百十圖　醉群面類
第百十一圖　醉群面類
第百十二圖　醉群面類
第百十三圖　醉群面類
第百十四圖　醉群面類
第百十五圖　醉群面類
第百十六圖　醉群面類

第百十七圖　醉群面類
第百十八圖　醉群面類
第百十九圖　醉群面類
第百二十圖　醉群面類
第百二十一圖　醉群面類
第百二十二圖　醉群面類
第百二十三圖　醉群面類
第百二十四圖　醉群面類
第百二十五圖　醉群面類
第百二十六圖　醉群面類
第百二十七圖　醉群面類
第百二十八圖　醉群面類

第百二十九圖　醉群面類
第百三十圖　醉群面類
第百三十一圖　醉群面類
第百三十二圖　醉群面類
第百三十三圖　醉群面類
第百三十四圖　醉群面類
第百三十五圖　醉群面類
第百三十六圖　醉群面類
第百三十七圖　醉群面類
第百三十八圖　醉群面類
第百三十九圖　醉群面類
第百四十圖　醉群面類

第百四十一圖　醉群面類
第百四十二圖　醉群面類
第百四十三圖　醉群面類
第百四十四圖　醉群面類
第百四十五圖　醉群面類
第百四十六圖　醉群面類
第百四十七圖　醉群面類
第百四十八圖　醉群面類
第百四十九

第七十圖　隨群面第二類（第百三十八號）
隨群面第二類（第四十二號）

正倉院の伎樂面は總計百六十四面あるが、その名稱については、特殊なる二三の外は全く不明とされていた。しかるに嚴密調査の結果面そのものに墨書ある「波羅門・獅子・大孤兒・師子・師子兒・治道・隨群」等の記載を手懸りに類別整理するに、古來伎樂の文獻に傳えた大孤父・大孤兒・呉公・金剛・迦樓羅・崑崙・呉女・力士・波羅門・醉胡從の諸面の幾組かが、混合錯雜せるものであるとの見極めがついたので、先づ面全體を材質的に木製と乾漆製とに分ち、その各項について師子・師子兒・治道・呉公・金剛・迦樓羅等々の種類別に圖錄解說する事とした。

木製伎樂面は百三十二面を算え、正倉院伎樂面の八割を占めるが、その二三を除く外は全部が桐製で、法隆寺献納御物伎樂面の樟木製なると甚だ異る。しかしその製作においては精粗優劣諸種のものが混在し、その作域技法の相異は、企劃の相異、具組の種別を察せしめるものとして注目に値する。

第一図　獅子面（第百二十八號）

大さ　高　三七・〇糎（獅子）　頭長　三七・〇糎　頭巾　三三・〇糎

お祭獅の獅子頭に似て更に進みのある彫刻で、桐材を用いて作られ、口が開き出来る装置になつている。目は大きく、鼻はいわゆる獅子鼻で鼻孔をハート形に作り、口は深くさけて四本の牙を刻出している。頭部顔面共に木地のままであるが眼玉は黒でかき、瞳に銀箔を作り眼窓裏には丹を塗つて睫を黒墨し、又鼻は鼻孔まで丹を塗る。口は唇・舌・口腔共に丹塗して、歯を胡粉に塗つて口腔の縁を黒でかいている。向牙・歯の頂に銀を、前歯の嚙面に鐵板を打つて、口を閉じる毎にカチカチと音をさせる工夫もしてある。耳は別木で彫刻し枘で差し込むようにしているが、内面は丹彩に黒で毛描きしている。

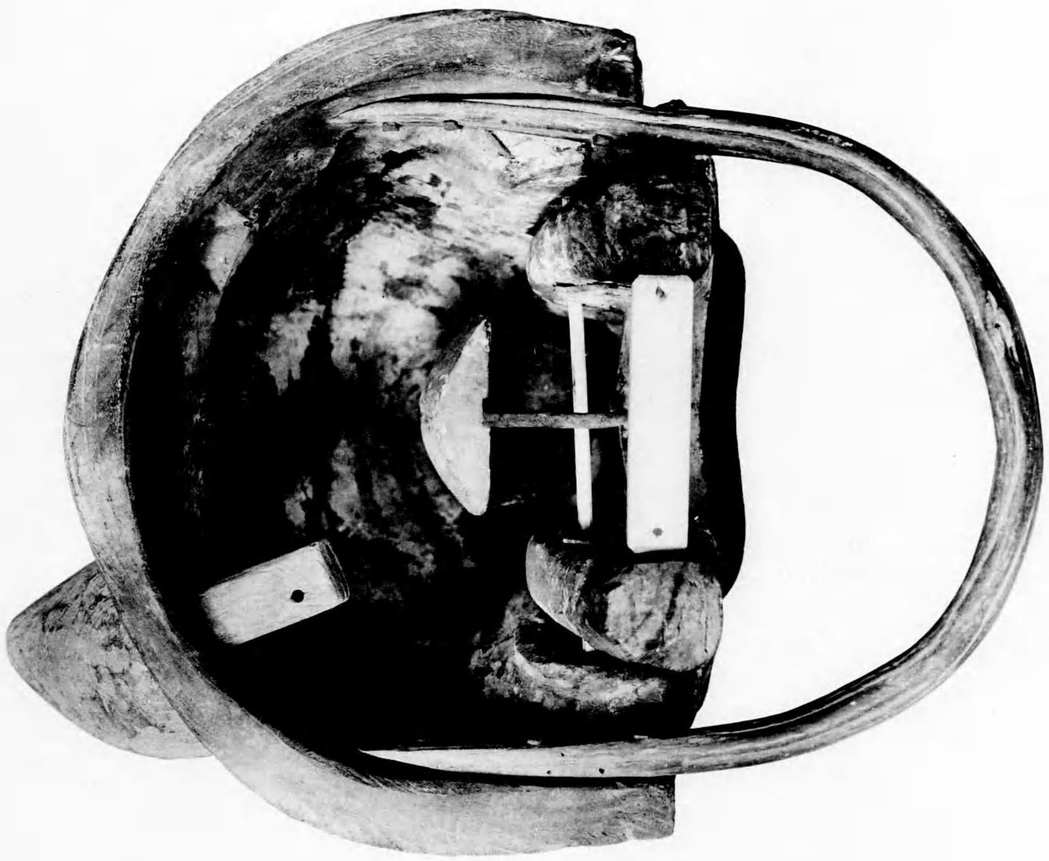
第二圖　獅子面（第百二十八號）側面

頭部と下顎とは別々に彫刻し、樞軸で兩者をつないでいるが、その樞部には鐵座金を打つて補強している。舌は木製丹塗りで、その根本を鐵線で下顎に取りつけ、閉口の度浮動する仕掛になつている。又顎の下部には綠毛を貼り、顎邊六個の孔を作り曲木をとりつけている。

三面（部分十二体）　国宝　薬師寺　奈良

第三圖　獅子面（第百二十八號）背面

中央に白く三角に見えるのは獅子の舌で、その下に凹字形に見えるは下顎である。舌根から出た鐵線は下顎の中央にとりつけられ、それは下顎の樞軸を通す鐵金具に連接している。その上に大きく洞窟のようになつているは上顎部で、これに丸木を曲げて釘付している。この獅子子面を被つた時の必要からであろう。この獅子面にも今の祭禮の獅子の如く獅子の胴をあらわす袋狀の裂をつけたらしく、面頸部を遶ぐる六孔とこの曲木とは、そうした時の取付けに役立つたものであろうか。



第三圖　鐵斧頭（長四十三糎）　京都

第四圖　獅子面（第百二十七號）

大さ　高　二七・〇糎　頭長　四〇・〇糎　顎徑　三三・〇糎

構造は前掲百二十八號面と同様、頭部と下顎部とを別々に彫刻して之を樞軸でつなぎ、別に耳と舌とを作り、舌は下顎部に取りつけ耳は枘で頭部に挿込むようにしているが、右耳と舌の取付金具を失つている。その前者と異るところは頭から額にかけて全面褐色の毛を貼りまた下顎に植毛していることであるが、なおこの面は相當實用にしたものと見えて齒のかみ合せも磨り減り、前齒の鐵板、牙齒の鐵鋲も失われている。鼻・眼玉は黑漆塗、鼻孔・口脣・口腔・舌は丹を塗り、齒は胡粉塗に墨で齒並の線を描く。

第五圖　獅子面（第百二十七圖）側面

眼尻の先きは鼻に接き、目線・口唇・鼻孔を穿つ。獅子面は數條で右耳穴。後頭部に十一

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

第六圖　獅子面（第百三十號）

大さ　高　二七・〇糎（輪を含まず）　頭長　四五・〇糎　頸徑　三二・〇糎

兩耳を欠くが、形相殊に物凄く、顔の全部と頤下には綠毛を貼り、眉と上唇緣には植毛した痕が殘る。目は朱にぬり目玉は黑くしてその瞼には綠青の輪廓と金界線を作り、鼻は黑漆塗して鼻孔に朱を彩し、口は舌・口腔・唇共に丹塗して、齒は黑漆地に胡粉をおき、前齒の嚙面に鐵板、牙齒頭に鐵鋲をうつ。

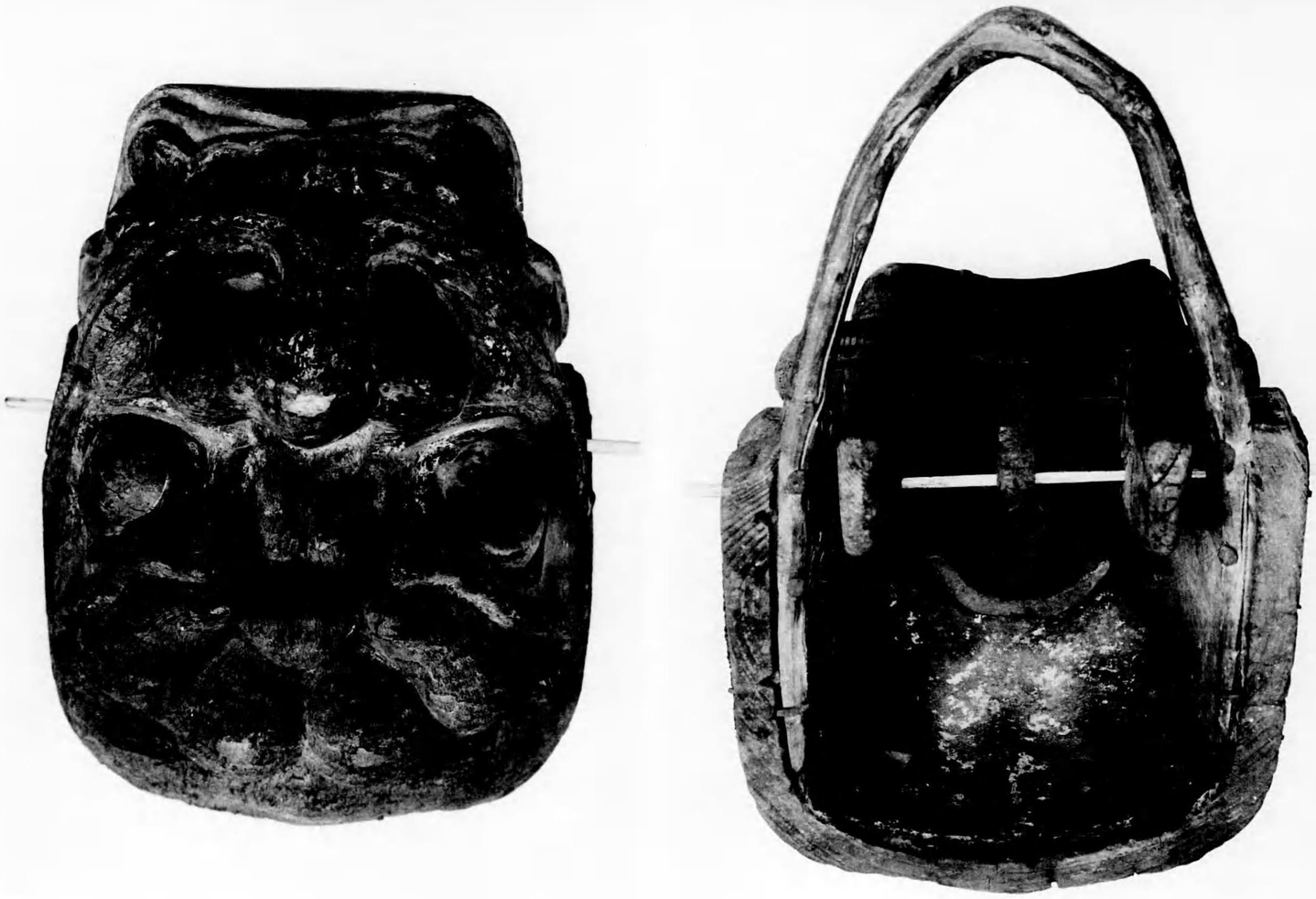
頭部にはさしあたって自然の曲木を釘止して、輪形を

舌と下顎とのつなぎにこれは鑄板を用い

構造は前形の二面と全く同じである。

第七圖

獅子面（寸法三十糎）正面・背面



面背・面五（縮尺二分の一）　面正・面側　圖十第

本品は一木造の彫像で、

頭部は直線の曲木を接ぎ合せて、背部を

くり抜いたものである。

顔面は面部の二箇を合せて面がかぶる。

第八圖　獅子面（第百二十四號）

大さ　高　二九・五糎　頭長　三九・〇糎　頸徑　三五・〇糎

前掲の三者に比べて、彫刻に凹凸少く溫和し向きに見え、或は雌獅子をあらわしたのではないかと思われる。構造は前者と大體同じであるが、これは朴材を以つて作られ、頭と顔には茶毛を貼り、耳・眼・鼻・口・舌に丹を塗り、齒と目は銀、瞳には綠青を彩し、頤下には白革を貼る。またその上唇と下唇の緣には植毛した痕がある。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

第九圖　獅子面（第百二十四號）正面

鼻孔を圓形に穿つことと、目に瞳孔を透し且つ目玉が動くように出來ている事とは、この面にのみ見られる特別な技法である。右耳を欠き、齒の嚙面に鐵板を打つていない。

面　五　面（縦二十四糎）　面　十　鐘　岡山県

〈動物埴輪〉

ともある。はたまた、猫の鼻面に鍵穴状のものをつけたものもある。

埴輪を用いた葬送儀礼は、古墳時代中期に始まり、古墳時代後期に入ってから、日本列島全域に広まったと考えられている。

を残している。なおこの面の頭部左内側には「岡所」の二字の墨書がある。

第十圖　獅子面（第百二十四號）側面

正内面には丹彩地に毛を墨書き、下顎と頭部の墨書には寺名からの儀の情報

同寺（国宝）の仏像の最傑作である。

右手は胸の前に上げ、左手は下に垂れ、両手共指先は内に曲げ、中指と薬指の間に水掻きがあり、足は蓮華の上に立つ。

同寺（滋賀県甲賀郡）蓮華王像　第十図

第十一圖　獅子耳墨書（第百二十四號）

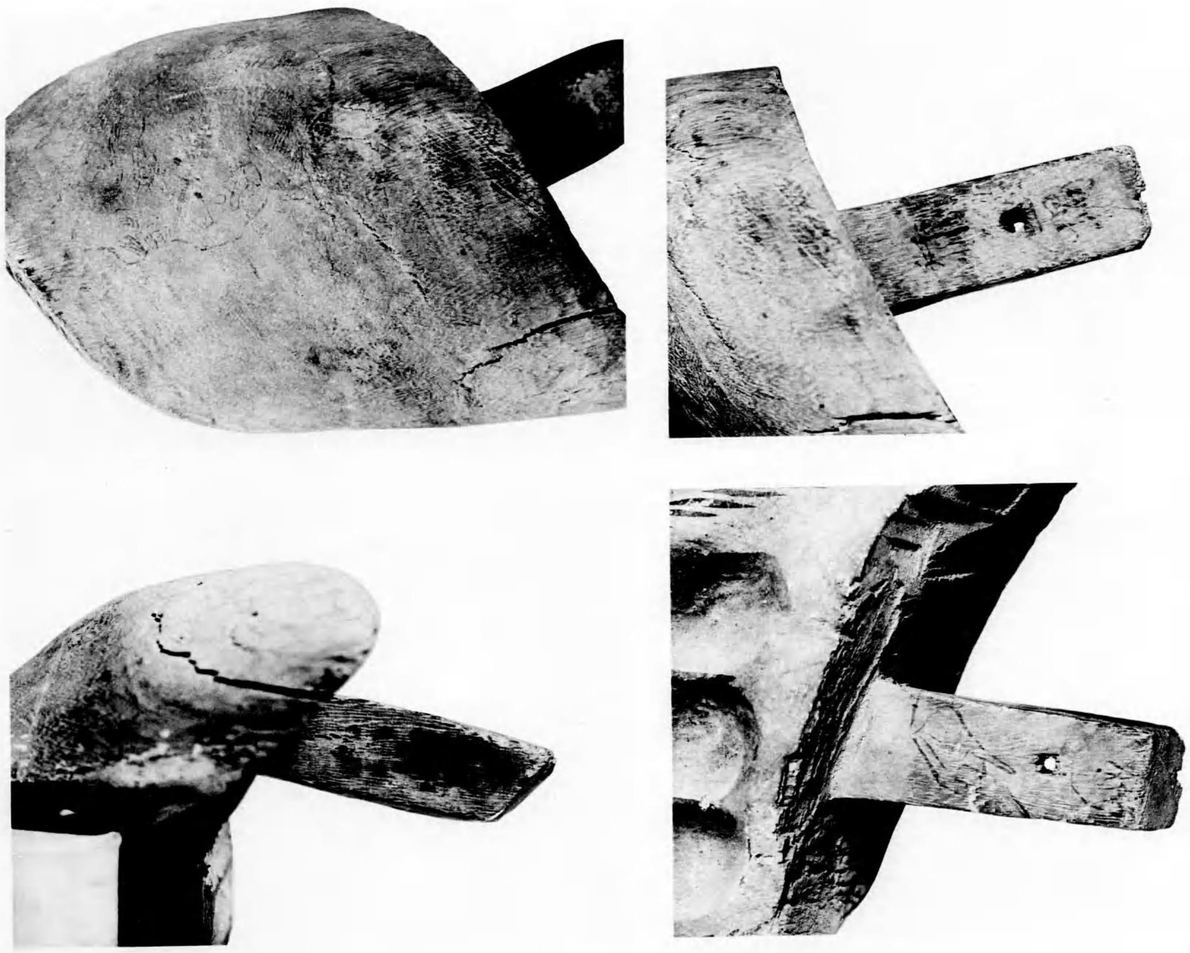
第百二十四號獅子面の左耳には、耳の外面とその枘の三面とに墨書がある。耳外面の墨書は人面の戯畫で、眉目のかきかたと、鼻下人中のかき方とは、法隆寺天井板戯畫・唐招提寺梵天台座戯畫と共に注意するべきであり、枘の墨書は「挿一堝」「六宕？」並に人の手を漫筆したもののようである。

[註] 上述のように、両方人の手を経過つたものであらう。

[illegible]

[illegible]

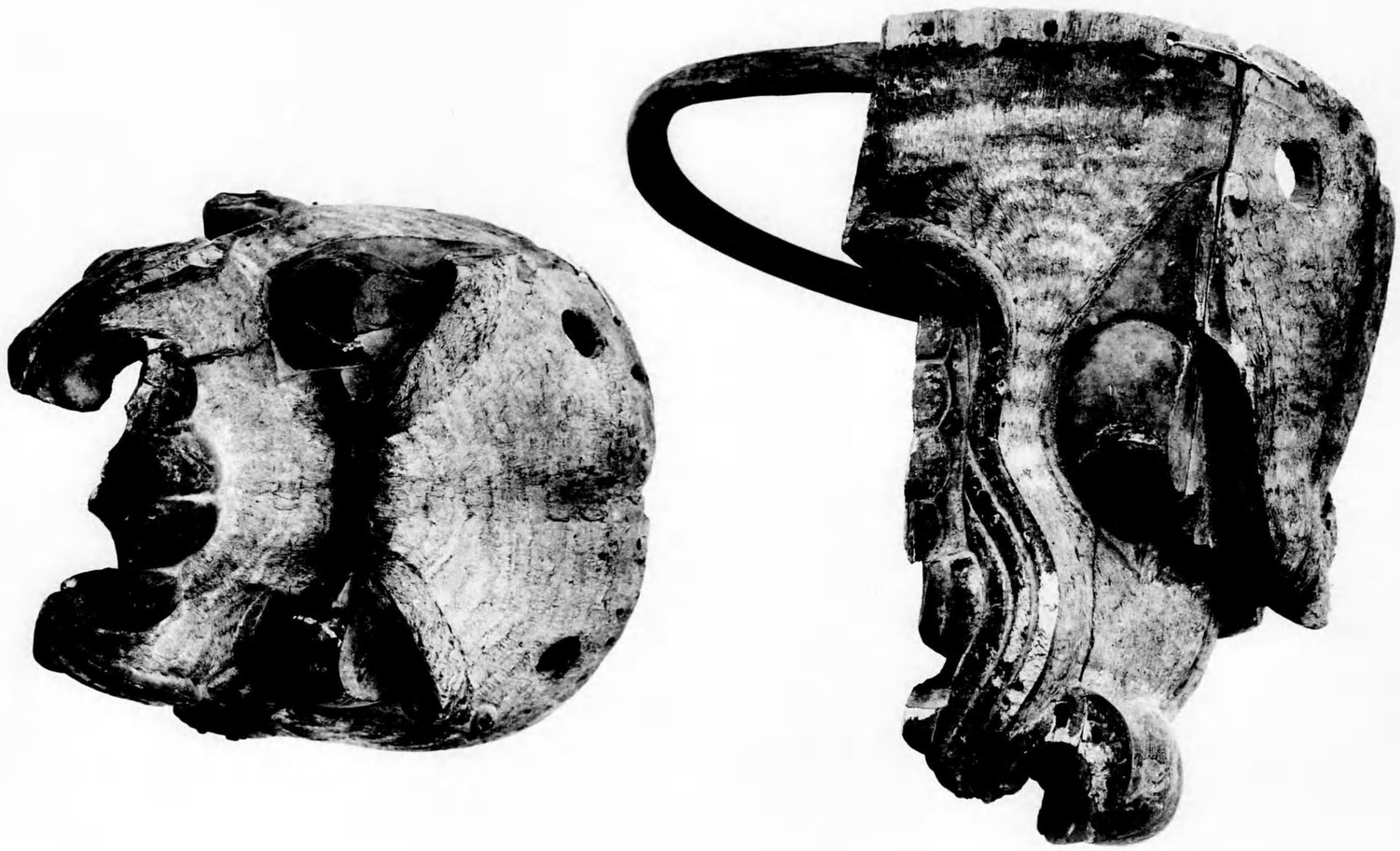
第十二図　鍵　子　北　遺　跡（第四三十四図）



第十二圖　獅子面・側面（第百三十一號）

大さ　高　四五・〇糎（輪を含めて）　頭長　三八・〇糎　頸徑　三三・〇糎

兩耳と下顎を欠失する上に上顎の一部を破損しているが、黄色の貼毛は鮮かに殘る。また、のつぺりした獅子面で、眼は黒い瞼の周に金界を廻らし、その内外に綠青の重圏を描き、眼蓋裏を丹に塗り、口は唇、口内共に丹塗して、齒のみ黒漆地に胡粉で白くしている。また眉に黒毛を貼り上唇緣にも黒毛を植えたあとを殘すが、眉の一部は双方ともにこれを失ふ。後頭部には小孔十四個を穿ち、眉上に圓形の耳孔を作る。



第十二図　鐙　上　側（第四次十二号）　左　側・鐙　側

大きな　鐙　革ひもの通る（穿孔された）　部分　ひも　鐙　鐙　側　ひも・鐙

鐙は馬の足を入れる部分と革ひもを通す部分とからなる。　図の一鐙は長方形の板を中心にして、その周囲を薄い板で囲んだ構造である。　中央の長方形の板は、ひもを通すための穴が二ヶ所あり、ひもを通すための穴の周囲は、ひもの摩擦を防ぐために、鉄板で補強されている。　鐙の内側は、ひもの摩擦を防ぐために、鉄板で補強されている。　鐙の外側は、ひもを通すための穴の周囲を、ひもの摩擦を防ぐために、鉄板で補強されている。　鐙の内側の鉄板は、ひもの摩擦を防ぐために、鉄板で補強されている。　鐙の外側の鉄板は、ひもを通すための穴の周囲を、ひもの摩擦を防ぐために、鉄板で補強されている。　鐙は馬の足を入れる部分と革ひもを通す部分とからなる。

第十三圖　獅子面（第二十五號）

大さ　高二七・〇糎　頭長三七・〇糎

現寸　三二・三糎

これも雌獅子をあらわしたかと思われる温和し向きの獅子面である。　桐材でなく朴木を材として彫刻し、　彩漆にて眉毛・口髭等の形を象ち麻布を漆貼りし上、　彩漆の法によつて麗作されている。　わゆる木心乾漆の法に

いる。　表面黒漆、　眼は目玉を白粉彩し、　眼蓋・唇・口・眼の縁に胡粉彩し、　前歯・犬歯の縁を指き且つその噛み面に淡墨で歯並の線を指き、　歯は胡粉彩、　舌は丹彩、　口腔は朱漆、　顎を断じ、　歯板をうちつけている。

第十四圖　獅子面（第百二十五號）正面・背面

鼻孔はハート形に透し、後頭部には鐵板を以つて鉢巻させている。頭部と下顎部との連繋はこれまでのものと同様樞軸によつているが、その鐵軸は舊物のままで且つ軸の左右に木製遊環を入れて開閉を自由にさせている。

第十四圖　藤千面（第百二十五號）　面・背面

藤製鐵金入れに開閉自由なる蓋をかぶせたる。

コルクにて栓をなしたる鐵製の栓抜きにて栓の抜かれたるもの。

ブラス。銀箔をもて固着せるもの。

神隠様おられものをもて製せられたるもの。

ゲッテ藤に類する。

ペーパー藤にて製せるもの。

第十五図　獅子面（第三百十六号）

大さ　高三寸五分　頭巾　巾一〇糎
　　　幅三一〇糎

彫刻としてはやや粗雑であるが、いわゆる獅子舞と眼瓦の浦安とは調和である。

顔には白粉を塗り、眼は瞳を黒くして緑青の線を画ら、白目の縁に赤を隈どり、眼瞼は赤く、唇面に朱を塗り、口・舌・鼻孔は赤く、歯並を黒で描き、その

第十六圖　獅子面（第百二十六號）側面・正面

顔に毛を貼つた痕迹は見られないが、上唇と下唇の線に沿つて竹釘をうつた小孔の連續するのは、以つてそこに植毛したことを察せしめる。兩耳を欠く。なお後頭部にも竹釘孔の連續するのが見られる。

第十六図　鐘　子　面（縮尺三十六分の一）　鐘　面・兵　面

考察するのが妥当である。

だいこう考察をつづける。面は多くの、さまざまな図柄でいっぱいの

じゅんぱいをうけたそれぞれの図柄である。はじめから計画的つ

ぎつぎに考察しなければならないが、土器子子面の図柄は

第十七図　獅子面（第百二十九図）

大きさ　高サ三・〇糎　頭長四五・〇糎　顔幅三〇・〇糎

下顎を欠き頭部のみ残る。彫刻は精緻で、眉に段を刻み瞳にも縦筋を彫る。顔面には朱・金・緑の彩色を施らし、眉毛を貼り、眼は瞳を黒くしてこれに絵具を打つ。

瞳には墨を用ゐ、前歯の嘴面には丹

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

第十九圖　[illegible]

第十八圖　獅子面（第百二十九圖）側面

頭部は三段に彫つて丹を塗り、且つ鬣の限り線を描き、下眼瞼には植毛して、後頭部に十個の貫孔をうがつ。又鼻孔にも丹を塗り口内面に丹で涎形を描く。

手水鉢の口元に彫刻されたる獅子頭へ、

獅子の手に巻き付いたる蛇は、多摩地方の

獅子の特徴なれど、下部に彫刻されたる、獅

子頭は、獅子舞のものにて、珍しき物

信濃（諏訪郡）　諏訪　　第十六圖

第十九図　獅子兒面（第八十四號）

大さ　竪　内　三三・〇糎　横　外内　一九三・八〇糎（頭部欠損入らず）

笑い顔した子供の面で、桐材の木心部を頂にして彫り眼と鼻孔と口とを透し、割合薄手に出来ている。顔は粉地に黄褐色を塗り眉は墨で描き、唇と頬には朱を彩し、また頭は黒く塗るが上く見るとその上に二段に髪を植え頂上に圓形の板金を打つた痕跡がある。なお耳の後に紐通しの孔と後頭に髪でも付したと思われる連続せる小孔がある。

獅子兒面（第百二十號）

大さ　竪　外内　現不明存　二六・〇糎　横　外内　一八三・〇〇糎（面部欠損入らず）

顔の素描のみならず、その製作までも前掲のものと甚だ似る。即ち顔は粉地に黄褐色を塗り、眉は墨で描き唇と頬に朱彩を施し、頭は黒に塗り且つ薄手に作る。恐らく同著一具として作られたものであろう。只前著に比べてこれは剥落破損多く頭部の大半を失う。

第十七圖　蓮台弓箭　（縮尺十五分の一）

第二十圖　獅子兒面（第四十四號）

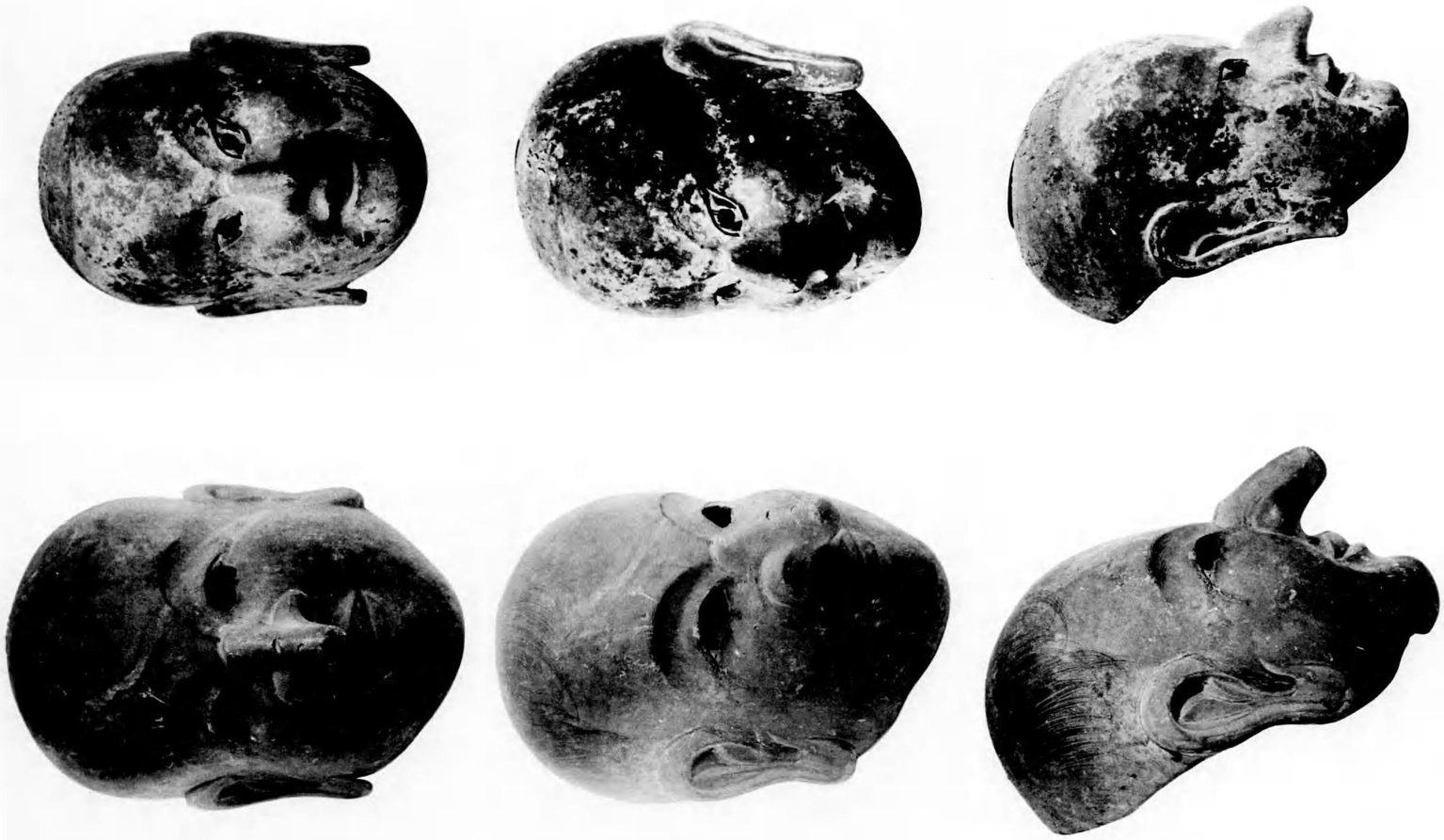
大さ　竪　内　三三・五糎　横　内　二五・三糎（面ガ狂ハズ）

利發な少年の顔をしている。製作的にもすぐれ耳の彫刻などもなかなか殺い。鼻孔二、口の五孔を透し全面黑漆殺の上に顔には群青を塗り、眉と耳孔に朱彩、歯両眼に月光ロ、後二の農書がある。頭部は黑漆の上に三段に髪を植え項に金銅回板を打つ。耳後に紐孔、頭部縁に連綴せる小孔を穿ち、また面の内側中央に「東大寺延均師」とあり、天平勝寶四年四月

獅子兒（？）面（第六十二號）

大さ　竪　内　三六・〇糎　横　外内　二八・八〇糎（面ガ狂ヒテ大ル）

眼・口元・耳の彫刻など前掲第四十四號の面に似るが、顔は黑漆地に赤色を塗り、且つ口邊に農書を農書せるは、獅子兒とするに不適當かもしらぬ。口は閉じ両眼と鼻孔を透し、眉と頭髪を農書するも頂上髪に植髪して回形板金を貼した痕迹を殘す。面の内側中央には農書して「東大寺延均師」とあり、両者の製作的類似も肯かれる。



第十四図（第五十五号）　第十五図（第五十六号）　第十六図（第五十七号）

第二十一圖　獅子兒面（第百三號）

大さ　竪 内二三・五糎 外二五・五糎　横 内一五・四糎 外一九・〇糎（頭が狂入らぬ）

耳後頭部まで一木で彫り、薄手にして、兩眼と鼻孔のみを透す。頭を黒漆塗、顔面全部を胡粉で白色に塗るが、製作は粗雜である。

獅子兒面（假第百十三號）

大さ　竪 内二三・五糎 外二六・五糎　横 内一五・五糎 外一八・八糎（頭が狂入らぬ）

また、後頭部まで一木彫成、薄手で兩眼と鼻孔のみを透す。頭は黒漆塗、顔全部を胡粉塗し、目元と頰に僅に黄褐色のくまどりを作るが、製作的には前掲第百三號面と全く同じで、一具の作と思われる。下顎には虫喰が多い。

第二十二圖　獅子兒面（第二號）

大さ　竪（内）二五・〇糎　横（内）一六・五糎　（外）一九・〇糎（頭が這入らぬ）

白面少年の相をなし、両頬に笑窪を彫り、眼・鼻孔・口の五孔を透す。顔は全部胡粉塗で目口等にも彩色なく頭は黒く塗る。なおこの面の右耳裏には「獅子」の墨書がある。

獅子兒面（假第百八號）

大さ　竪（内）二五・〇糎　（外）二七・五糎　横（内）一五・五糎　（外）一九・五糎（頭が這入らぬ）

少年相をして頬に笑窪を彫り、眼・鼻・口の五孔を透しす。但しこの面は前掲のものに比べて眉目尻共に下り且つ耳の形の異るのは相似の中に小異あらしめたものといえよう。頭は黒く、額は胡粉に塗るが、眼球は墨と緑青にて隈どり、眉は墨書、唇には朱を彩して歯に銀泥を塗る。右頬表に「逃」の字を墨書するは何の意味か解らない。

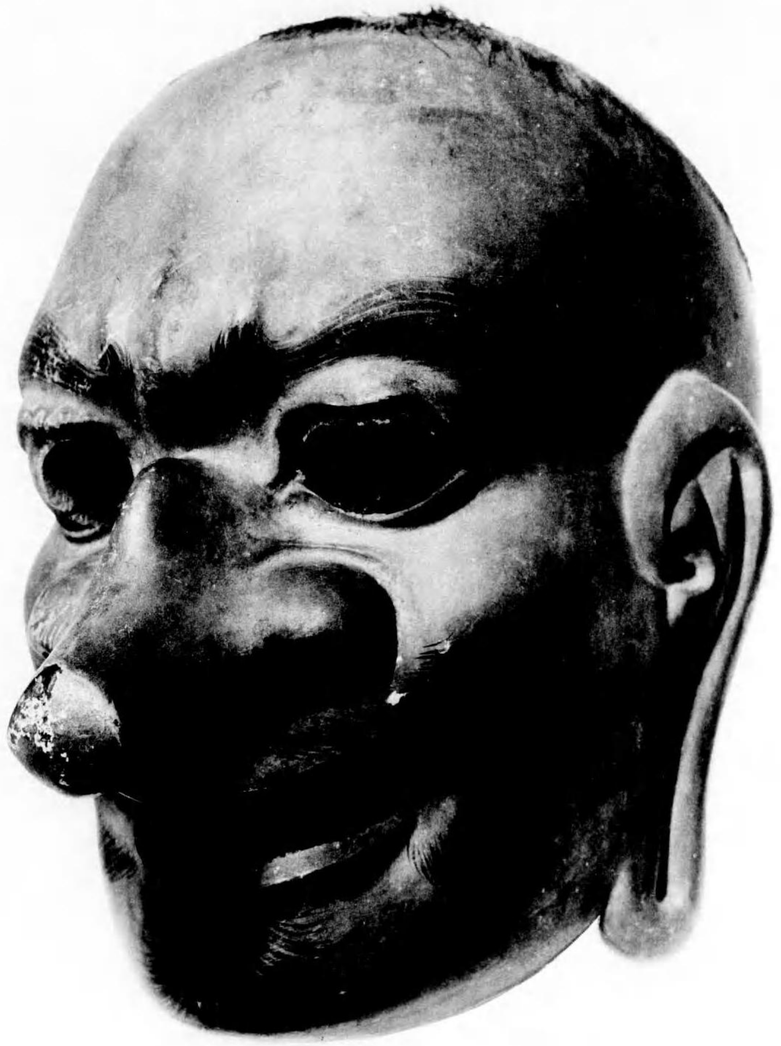
第十四 [illegible]

第十五 [illegible]

第二十三圖　治道面（第三十六號）

大さ　竪　内　二九・〇糎　横　内　一八・〇糎（頭に大きすぎる）

赤面長鼻怪偉の相をして、眼は大きく、鼻孔は小さく、口は細く透し、又耳朶には貫通孔を作つている。全面黒漆塗地に顔面丹を塗り、眉・口髭・頤鬚は墨書し、唇と頬と耳には朱彩を施し、目と歯には銀泥を塗るも今は燒けて黒色を呈している。頭は黒漆塗地に三段に髪を植え頂に金銅圓板を釘止めし、耳後の紐孔には白革の細紐片を殘している。なお右頬の内面には「天平勝寳四年四月九日□□□」の墨書があり、大佛開眼會使用のものと知られる。



第二十三圖　谷　猿　面（第三十六題）

第二十四圖　治道面（第三十八號）

前掲治道面の正面と側面とを示す。眉毛・鬚髯の線描は勇壯にして、長大の鼻は超人間的である。

治道面（第四十六號）

大さ　竪　内二七・〇糎　外三二・五糎　横　内一八・八糎　外二四・〇糎（頭に大きすぎる）

容貌怪偉前掲の治道面に似るが、眼の形・眉の委に小異があり、且つ顔は黑漆地に黄土の具を塗り頬に朱をぼかし、頭には毛髪を墨書した上に茶毛を三段に貼る。

後二百四十一図　仮面（前面）

後二百四十二図　仮面（後面）

これらの面は、ロンドンの博物館にあるものです。

ロンドンの博物館の中にあるものです。

第二十五圖　治　道　面（第三十七號）

大さ　竪　内　二九・〇糎　横　内　一八・〇糎（頭に大きすぎる）

赤面長鼻怪傑相、前々掲の第三十六號に似るが眼の輪郭更に鋭く眉の間に山形の皺を作つているところが異る。頭には白髪を三段に植え金銅圓板をうち、顔は黒漆窟地に丹を塗り目と齒には銀泥を塗る。面内裏中央には「東大寺基永師作、後一、天平勝寶□□」の墨書がある。

治　道　面（第二十一號）

大さ　竪　内　二六・〇糎　外　三二・五糎　横　内　一七・〇〇糎　外　二四・〇〇糎（頭に丁度よい）

赤面長鼻の相をなすが、小鼻の彫刻、眼尻の皺、口髭の線描等甚だ神經的である。口は閉じ眼と鼻孔の四孔を透し、頭に茶毛を三段に植え、左頬裏に墨書して「拾目師」とある。

[illegible]

[illegible]

在 [illegible] 区（第八十一号）

[illegible]

[illegible]

第八十六号　在 [illegible] 区（第八十九号）

第二十六圖　治道面（第三十九號）

大さ　竪　内　二六・五糎　横　一九・〇糎（頭に大きすぎる）

眼と鼻孔の四孔を透し、全體黒漆地に顔は丹に塗り唇に朱、目に銀泥をぬる。頭は毛髪を墨書した上に髪を植えているが、後頭部の大半を欠失している。面の内側右頬うらに「東大寺」同左頬うらに「左」字の墨書がある。

治道面（第八十三號）

大さ　竪　内　二七・〇糎　横　内　一八・五糎　外　二四・〇糎（頭に大きすぎる）

赤面長鼻相、眼と鼻孔の四孔を透し、頭には髪を三段に植え金銅回板をうつた形迹をとどめ、顔には胡粉地に丹を塗り、眼は銀、唇には朱を彩し、眉毛・口髭・頤鬚は墨でかいている。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

第二十七圖　吳公面（第三十號）

大さ　竪　外内　二二・六糎　横　外内　二一・三糎（面に大きすぎる）

下顎の張った壯年の相で、眼孔二鼻孔二口孔一の五孔を透し、耳朶に貫孔を作る。頭は黑漆に塗り、顔は胡粉下地に綿着を發り、眼玉の縁は墨で隈取り、齒は銀、脣には朱彩を施す。なお面の右頰裏に「九年七月作大田和万呂功七人」左頰裏に「作大田□□の墨書がある。

吳公面（第五十八號）

大さ　竪　内　二・五糎　横　内　一七・五糎（頭巾とじて入る）

眼鼻口の五孔を透し頭部は黑漆塗、顔は黑漆地に群青を塗り、口脣と鼻孔と耳内には朱、眼と齒には銀泥を塗る。角頭部正面に三釘孔を穿ち、これはもとここに金銅透の冠をうちつけた痕であろう。後頭部には小孔連續し、耳後には白帛の紐殘欠を存している。

は。

[illegible]

大き　縦　[illegible]　横　[illegible]

獅子面（等身十八倍）

[illegible]

[illegible]

[illegible]

大き　縦　[illegible]　横　[illegible]

獅子面（等身十倍）

第二十九圖　獅子面（等身十倍）

第二十八圖　吳公面（第八號）

大さ　竪　内　二五・〇糎　横　内　一六・二糎（頭に丁度よし）

また精力的な壯者の相をなすが、目頭を三角に作り、額を山形に刻る。全面胡粉を彩し頭部頂上のみ黑く塗る。目鼻口の五孔を透し、紐孔はなく、又右頰裏に「用論」の二字を墨書している。用論は閏論のようにも見えるが、何れにしてもその意味は解し兼ねる。

吳公面（第百七號）

大さ　竪　内　二八・五糎　外　三三・〇糎　横　内　一六・七糎　外　二二・五糎（頭に丁度よい）

眼鼻口の五孔を透すが、全體厚手で彫刻も粗雜である。頭は墨、顏は綠青を塗り、唇に朱、眼と齒とには胡粉を彩し、墨で眉毛をかく。後頭の小孔も耳後の紐孔もない。

第二十八圖　契公面（巻八、図）

第二十九圖　金剛面（第七十一號）

大さ　竪　内二九・五糎　横　内一八・〇糎　外二七・〇糎（頭に大きすぎる）

怒の力相を示し、下顎は張り耳はつつ立ち耳朶に貫孔をつくる。頭は黒漆塗で頂に髻を作り、顔は胡粉地に肉色を塗り眼鼻口の五孔を透し、唇に朱、歯と目に銀色を彩し、眉と鬢毛は墨書し、口髭は馬毛を植えている。この面は桐の根元の材にて耳まで一木で彫出しているが、髻は別の桐材にて作つたものを枘で嵌めこんでいる。

作ったに特別の別世界、別なる世界の出現を夢見たのである。

元祖の渦体の側に原始的土偶を置いてみる。ちょうど開花前の蕾、「生命の誕生」を暗示する。未だ眼は閉じられている。未だ眼を開く前の目を開く前、「生命の誕生」を暗示する。未だ眼は閉じられている。

全体を貫通する一つの世界を成立させた。

（『縄文式土器』講談社、昭和三十二年、参照）

（高一二七センチ）　国宝　岡本太郎　岡山市・川崎製鉄所

第三十圖　金　剛　面（第七十一號）

前掲面の正面と側面とを示す。鬢の毛を渦巻き形に描く。

金　剛　面（第百號）

大さ　竪　内　二八・〇糎　横　内　一八・〇糎　外　二六・〇糎（頭に大き寸ぎる）

製作厚手、眼鼻口の五孔を透し、耳後に紐通しの孔、後頭部に連續せる小孔を穿つ。髭は別材を刻して嵌めこみ且つその正面に十字花形の金銅板金を飾る。全部黒漆塗で、顔はその上に更に褐色の具を塗り、唇と鼻孔は朱、目は銀色にぬり、且つ髮際には毛髮を墨書している。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

第三十一圖　金剛面（第四十五號）

大さ　竪　内二二・八糎　外四三・〇糎　横　内一七・七糎　外二〇・三糎（頭に大きすぎる）

頂に髻を結び、眼鼻口の五孔を透し、白面力士の相をなすが、彫刻はやや粗雑である。頭は黒漆塗、顔は胡粉塗で唇には紅、眼蓋は赤で隈どり、齒に銀泥を塗り齒並を金泥でかく。又顎には鬚を植え、左頰裏に「相模國」の墨書がある。

金剛面（第五十二號）

大さ　竪　内二四・〇糎　横　内一七・八糎（頭に大きすぎる）

白面力士の相をなし、眼鼻口の五孔を透し、頂に髻を作るが、髻の姿は甚だ異様である。髮髻は黒塗、顔は胡粉塗で、口と目には銀線で隈取る。後頭部欠失。

る。[illegible]

[illegible]

大きさ　高　[illegible]　横　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

大きさ　高　[illegible]　横　[illegible]

[illegible]

第三十二圖　迦樓羅面（第七十二號）

大さ　竪　内　二七・〇糎　横　内　一八・〇糎　外　二〇・五糎（頭に大きすぎる）

霊鳥迦樓羅の相をなし、頭に雞冠をたて、鼻を小さくして嘴を大きく作る。全面緑青を塗り胡粉で羽毛をかき、雞冠と耳と頤の垂肉とは朱彩を施し、顎下は肉色に塗り墨で羽毛をかく。この面の製作は、他の面とやや異り、桐の一木を刻して大體の形を作つた上に、要所に從つて麻布を貼り又乾漆にて形を整えたもので、雞冠や口内面には今も麻布が殘る。兩眼と口を透すが、眼孔は小さく寧ろ口より外を見たものであろう。

第三十三圖　迦樓羅面（第六十三號）

大さ　竪　内　二六・〇糎　横　内　一七・〇糎　外　二〇・〇糎（頭に大きすぎる）

前掲の迦樓羅に比して、雞冠の形や頬垂肉の形がちがい、耳の形もこれは人の耳に似る。彫刻はやや粗雑だが兩眼と口を透し、頭は黒塗、雞冠と顔は胡粉塗して、眉は墨にて描く。

迦樓羅面（第百十五號）

大さ　竪　内　二五・〇糎　外　三〇・五糎　横　不明（頭に丁度よい）

後頭部を欠失し、且つ朽損が多いが、髪際には前者の何れにもない細かい彫刻がある。又頂は黒漆塗、雞冠は胡粉地に銀彩を施し、顔は緑に塗つて目と嘴には金箔を押し、頤下には羽毛を描く。

第二十三圖　鬼　獅　獅　面（第六十七圖）

第三十四圖　崑崙面（第八十八號）

大さ　竪　内　二七・三糎　横　外内　二九・〇糎（面に大きすぎる）

眼をむき眉耳を立て獅子鼻をした怪奇の相をなし、兩眼と鼻孔と口と五孔を透す。割合厚手の面で全面黑漆地に丹を塗り、耳と唇と目とには更に朱彩を施し、口王には金線を限取り、耳内には界線と毛とを墨畫をしている。又頭頂と眉と口唇周邊にはそれぞれ植毛をしたらしいが、多く脱落して、殘るのは少い。

崑崙面（第四十八號）

大さ　竪　外内　四二・〇糎　横　外内　二九・〇糎（面に大きすぎる）

梱材厚手の彫刻であるが、部分的には乾漆を併用している。表は崩れのものに似て更に怪異、眼尻はつり上り鼻孔はハート形に作られ、頂には角のあつた形迹さえある。酒は黑漆地に緑青を塗り、眼は瞋、唇と耳と鼻孔と目盃には丹を彩り、頭と頤には植毛を植えている。なお内側中央に「毒龍□」の墨書がある。

[illegible]

崑崙面（第四十八號）

[illegible]

[illegible]

第二十四圖　崑崙面（第八十六號）

[illegible]

第三十五圖　崑崙　面（第七十九號）

大さ　竪　内　二八・〇糎　横　内　二六・〇〇糎　外　（頭に大きすぎる）

表現は粗野である。獸耳にして口に上向きの牙を作り、目は大きく、頂は隆起して悪鬼の相をなす。厚手で、眼と鼻の四孔を透し、全面胡粉を塗り、眉・目・鬚髯・耳毛をそれぞれ墨でかく。なお左頰表に「爲首苦史」の墨書がある。

崑崙　面（第百一號）

大さ　竪　内　二九・五糎　外　四一・八糎　横　内　二九・二〇糎　外　（頭に大きすぎる）

角まで一木で彫り出し、兩目兩耳兩鼻孔並口角の二所、計八孔を透し、頭は黑漆、顔は胡粉地に丹と蘇芳を塗り、角と眼と齒牙は白く、眼球は黑く塗つて綠と金で二重に隈どり又眼緣に沿つて朱線をめぐらす。なお額上髮際に竹釘を打ち並べているのは、もとここに植毛したのであろうか。

39026

第三十六圖　崑崙面？（第九十八號）

大さ　竪　内　三六・〇粍　横　外内　二九・〇粍（頭に大きな孔あり）

面貌は恐しいというより滑稽である。眞論もあるがしばらく崑崙面に入れておく。口は閉じて下向きの牙を彫り出し、目と鼻の四孔を透す。製作は粗雑で、眉には植毛をし、顔面は胡粉地に黒褐色を塗り、歯牙と眼玉は朱、眼縁は朱彩し、眼玉には緑彩でくまどる。

崑崙面？（第百十二號）

大さ　竪　外内　三七・〇粍　横　外内　二四・五粍（頭に大きな孔あり）

精面悪相、厚手の面で、額には三段の隆起を作り眼鼻口の五孔を透す。顔は胡粉下地に朱彩の具を塗り、唇に紅、歯と眼に朱、眼玉に緑青を彩し、眉毛は墨で描く。この面後頭下部に小孔連綴す。

第三十七圖　吳女面（第十七號）

大さ　竪　内　二三・〇糎　横　内　一七・〇〇糎　外　二〇・〇〇糎（頭が著しく入る）

吉祥天女を思わせる様な貴女の相をなし、髪は正面で二つに分けてそれぞれ前髪をとつて二つの髻を結い、顔は爪實形に作り眼と鼻の四孔を透す。髪は黒漆塗、顔は胡粉塗で、髪際と鬢は細毛を描き、唇に朱を點じ頬には紅を暈かし、耳は肉色に塗る。又眼は淡墨で隈どり、眉は淡墨の下塗に眉毛を墨で細筆している。なおこの面の右頬裏には「基永師作」の墨書がある。

第三十七図　面　女　奴

（縦二十六・〇糎）

第三十八圖　吳女面（第十七號）

前掲吳女面の正面と側面を示す。髪は双方共端を接木し、耳後に紐通しの孔を穿つ。

吳女面（第十一號）

大さ　竪　内　二三・〇糎　横　内　一七・三糎（鼻が辛して入る）

白面少女相、前掲の吳女に比べて彫刻はやや粗雑であるが、結髪はより技巧的で、髪を正面で二つに分けて前髪をとり兩鬢を作り、頂に大きく髪を結び、前立てには黒地に朱の花文を描く。顔は下ぶくれに作り目鼻の四孔を透し、胡粉を塗つて唇に朱を彩し、小鬢は墨で描き、目は淡墨でくまどる。なお右頰うらには「讃岐」内側中央には「吳□少女」の墨書がある。

第三十八圖　狐　文　面（第十二號）

（第十一號）

狐　文　面（第十一號）

狐　文　面（第十二號）

第三十八圖

第三十九圖　力士面（第二十四號）

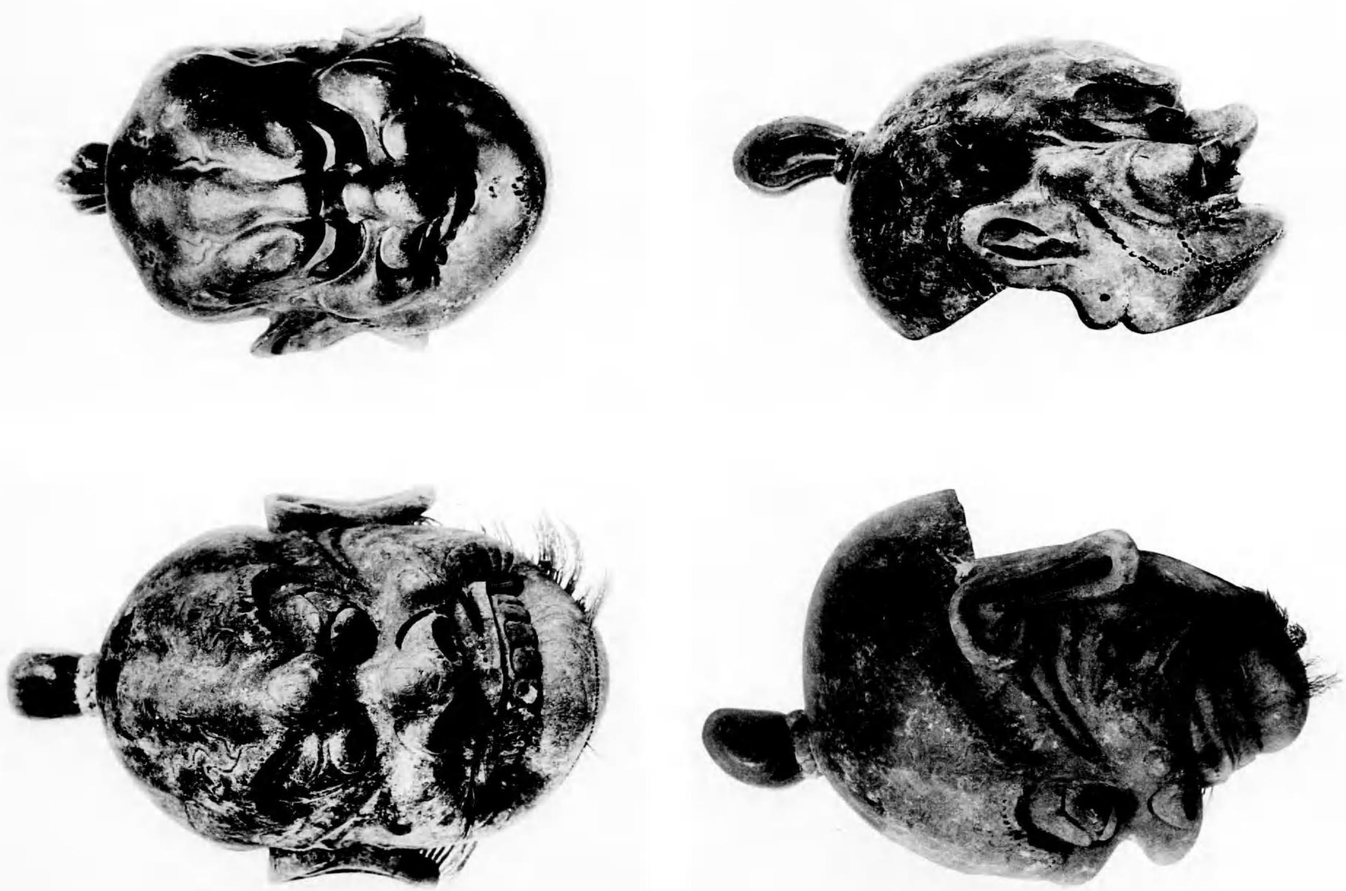
大さ　竪　内　二八・三糎　横　外内　三八・二糎（頭に于更さ）

赤面力士相、頂上の髻は一木から刻出し耳は接木して目鼻の四孔を透す。製作癖に倦れ額にかん筋まで刻出している。頭は黑漆、顔は黑漆地に丹を塗り、眼と歯は黄、脣は朱彩し、眉と髮際は墨で毛筋をかき、又頤と口邊には綿相毛を植えて髭をあらわす。なお面裏中央に墨書して「東大寺前一、勝善奈良作、天平勝寶四年四月九日」とある。

力士面（第七十號）

大さ　竪　内　二七・〇糎　横　外内　二六・〇糎（頭に大きすぎる）

厚手の作で、眼鼻の四孔を透し、耳朶に貫孔を作る。精巧な作でかん筋を彫出し髻の元結を縄狀に刻するが、力強さは前期面に及ばない。髻髮は黑漆、顔は木地に丹、眼と歯は銀彩して、その眼玉の周囲には緑青を彩し、眉毛口髭頤鬚には綿相の植毛をしている。



七十 面（縮小六分の一）

七十 面（縮小五分の一）

第四十圖　力士面（第五十六號）

大さ　竪　内二六・五糎　横　内一八・〇糎（頭に大きすぎる）

赤面力士相、厚手の面で眼鼻の四孔を透し、頭は黒漆檢、顔は丹檢に眉髯を書き、齒は銀、眼は銀にして眼玉の周に綠青の圈を描き、髻の飾は赤に染め結紐は蘇芳に塗る。又鼻下と頤には獸毛を貼した形迹がある。

力士面（第五十號）

大さ　竪　内二七・〇糎　外四〇・五糎　横　内一七・〇糎　外二一・七糎（頭に大き過ぎる）

白面力士相、又厚手の作で四孔を透し、頭は黒漆檢、顔は胡粉に塗つて髭は薄墨でかく。なおこの面の右頰うらには「力士」の二字を墨書している。

第四十四　七　十　四（紀元前六六六年）

第四十五　七　十　四（紀元前六六六年）

第四十一圖　波羅門面（第一號）

大さ　竪　内　二三・五糎　横　内　一六・〇糎（頭巾入らぬ）

額に皺を寄せた老人の相をなし、頂は木地のままであるが、顔は淡緑の具を塗り、眼と歯は銀、眉毛は墨書している。鼻目の四孔と口を透し、耳孔を貫いて紐通孔を兼ねさせている。なおこの面の内側中央には墨書して「波羅門」とある。

第四十一圖　蘇羅門面（第一期）

面中央の口は墨書ありて「蘇羅門」とある。

門の面の作りかたは、全体を平面的に作り、目を開いて口を開き、目の円形は黄土にて作る。鼻は目の円形と同様に作る。口は本体の面のまゆげを作る。口の周囲は、全体の結合を強固にするため、口の周囲に沿って、一定の間隔を置いて、穴を穿ち、穴の内部に、小さな粘土の人物を挿入して、固定させている。

第四十二圖　波羅門面（第一號）

前掲波羅門面の正面と右側面を出す。

波羅門面（第三十四號）

大さ　竪　内　三七・三糎　横　外内　二二七・五糎（面上下厚さ）

長髭老人の相となし、鍍の樣子眼の形全と前掲の波羅門面に似るが、製作は更に優秀である。眼鼻口の五孔を透し、顔は黑漆地に丹を塗り眉毛・口髭・頤鬚を墨で描き、目に緑青を入れ、頭は黑漆塗に樫相毛を三段に植え頂に金銅回板をうつ。なお左頰うらに「後一、天平勝寶四年四月九日」の墨書がある。

可以看出、从外表观察出的区别点。

首先长脸长方、面颊略瘦的可能是南方人；或许是小脸方像是蒙古人的长脸。鼻梁长直、心宽

的长脸。嘴唇口唇线明显、嘴唇厚的人。面颊的骨骼突出的长方脸、口唇・面颊长的长脸。面

颊宽的人沙色的长脸。眼睛大眼睛的长脸眼睛小的长脸。眼睛圆的长脸。

长脸 (南 北) 面颊 (宽 窄) 眼睛 (大小) 嘴唇 (厚薄)

新疆 区 (宽 | 窄 宽)

(南北 长脸 区 宽 窄 长 宽 窄 长 宽 窄)

特征十八区 新疆 区 (宽 | 窄)

第四十三圖　波羅門面（第十八號）

大さ　竪　内　二九・五糎　横　外内　二一五七・五糎（頭に下蓋よし）

長鼻老人相、顔は胡粉地に肉色を帶び、唇は朱、齒は黑く塗め、頂には白髮を貼る。割合薄手の面で眼鼻口の五孔を透し、右頬裏に「萬永師作」の墨書がある。

波羅門面（第二十號）

大さ　竪　内　三五・〇糎　横　外内　二一七・五の糎（頭蓋入らず）

長鼻老人相、厚手の作で目鼻口の五孔を透し、顔には黑漆地に胡粉を帶び更に丹を帶び、頭には頂に金銅圓板を用うる事なくただ幾段かに條相の毛を貼る。又眉と口髭・頤髭は悉く描き、齒並には銀を帶る。左頬裏に墨書して「裕目師作」とある。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

第四十四圖　大孤父面（第二十七號）

大さ　竪　内　三二・〇糎　横　内外　二八・〇〇糎　外　三二・〇糎（頭に了度よい）

長眉老人相の面で、眼鼻口の五孔を透し、頭部を長大に作る。頂は黒漆塗、顔は黒漆地に代赭色を塗り、齒に灰黒色、目に綠青を彩し、眉と口邊と頰とにそれぞれ長毛を植えている。製作殊に優秀で、且つ保存もよい方である。

第四十四圖　大瓢父面（第二十二號）

（この人物の正面を表す。顔は黒褐色を帯び、眉は太く、目は大きく開いている。口は大きく開き、口の両端を強く引き、口の周囲に髭を生じ、顎髭は黒褐色を帯び、眉は黒褐色を帯び、顔は黒褐色を帯び、口の周囲に髭を生じ、口は大きく開いている。）

第四十五圖　大孤父面（第二十七號）

前掲大孤父面の正面・斜面・側面と面内側の墨書を示す。耳朶には貫孔を作り、後頭部下縁にはその耳寄りにのみ小孔五個又六個を穿つ。墨書は面内側の中央にあり「前一、東大寺、將李魚成作、天平勝寶四年四月九日」と讀まれる。

第四十五圖　大　頭　父　面（第二十四圖の側面・極彩色の部分を西面に移す）

第四十六圖　大孤父面（第百十八號）

大さ　竪　内二九・〇糎　外三一・八糎　横　内一七・〇糎　外二〇・七糎（頭に丁度よい）

長帽老人相、眼鼻口の五孔を透し、耳朶に貫孔を作り、顔の表現、皺の形なども前掲大孤父面と甚だ似るが、これは頂上に釘孔あり、この上に更に何物かが附加されていた事を想像させる。顔は赤褐に塗り、目は緑青、歯は銀、唇は赤に染め、眉と口邊と頰に植毛した痕がある。右頰うらに二行にわたる墨書銘があるが判讀しがたい。

大孤父面（第九十七號）

大さ　竪　内二九・〇糎　横　内一七・〇糎　外二〇・五糎（頭に大きすぎる）

長帽白面老人相、前二者に比べて皺の表現が少くいくらか愛いて見える。帽は内刳りせず内面頭成りに刳り、眼鼻口の五孔を透し、帽には麻布を貼ってひわれを防ぐ。帽は素地のままで顔は全部を黄白色に塗り、眼は白、唇は赤に彩る。帽子表面左側に「秋田」の墨書がある。

第四十七圖　大孤父面（第七十六號）

大さ　竪　内　三・五糎　横　外内　二〇六・二〇糎（頭蓋骨から）

長幅老人相、幅はまだ内彫りせず、内面を頭蓋骨に作つて眼鼻口の五孔を透し、幅は黒漆塗、額は黒漆地に肉色を塗り、唇は朱、目は綿苔で彩り頬に紅を塗かす。耳には貫孔を作り、眉・髭・鬚は共に植毛した形迹がある。目玉の大きいのは後から彫り嵌げたものであらう。

大孤父面（第百十七號）

大さ　竪　外内　三六・五糎　横　外内　二二五・〇五糎（頭骨にて入る）

長幅老人相ではあるが、幅の形は第二十七號の面に似て面も正面に棱を打ち雲を作る。額には眼鼻口の五孔を透し胡粉を塗り、唇に朱、眼に黄、歯に黒漆を上そおい、又口髭と頬鬚にのみ黄毛を植えている。なお右頬骨に「円形」の瘢痕がある。

[illegible]

[illegible]

[illegible]